

編集後記

過日、千葉県西北端、関宿町にある県立関宿博物館を訪ねた。当博物館は、利根川と江戸川が分岐するスーパー堤防上に設けられており、平成7年11月にオープンしている。「河川とそれにかかわる産業」をテーマに掲げ、利根川流域に生きた人々の生活の歴史、洪水・治水の歴史、河川によって育まれた産業や文化などを分かりやすく紹介している。かつての関宿城の天守閣を模した4階の展望室からは、利根川と江戸川とがここで分岐している様子を足元に見ることができる。

江戸時代初期、徳川家康の命を受けた関東郡代伊那家を中心に、それまで江戸湾に流れ込んでいた利根川の本流を、流路の締め切りや開削などを繰り返し、順次東方へ移し替えて銚子河口へ流す大工事が進められ、この東遷は承応3年(1654)に完成している。その間に、利根川の分流として関宿から江戸湾にいたる江戸川の開削も行われ、これにより江戸の町は大規模な洪水から逃れることができたという。利根川水系の整備により利根川水運は急速な発展を遂げ、利根川や江戸川は関東北部や千葉、茨城を結ぶ重要な交通路としてのみならず、銚子湊や那珂湊を中継地とする東廻航路とも接続し、奥羽地方からの諸物資を江戸へ運ぶ大動脈としての役割をも果たすことになる。

時代が下り江戸幕藩体制から明治新政権に代わろうとも、利根川水系での高瀬船による舟運は衰えを見せなかった。明治23年(1890)には、関宿を経由せずに利根川と江戸川とを直接結ぶ利根運河(全長8.5km)がオランダ人技師ムルデンにより竣工する。この利根運河では明治後期から大正時代にかけて、従来の高瀬船や内国通運会社の外輪蒸気船通運丸なども加わり、1日100隻以上もの船舶が盛んに往来した。その後、鉄道との競争、さらに自動車との競争に敗れ、利根運河の運河としての役割は衰え、昭和16年(1941)7月の洪水を契機に利根川の洪水防止の観点から政府がこれを買上げ、運河としての使命を完全に終えることになる。現在は、洪水調整水路という位置づけであり、親水公園として整備された水辺は市民の憩いの場となっている。

建設省は、首都圏の水需要に対応するために利根川下流から江戸川に水を送る北千葉導水路(印西市-松戸市、全長28.5km)を建設中であり、2000年4月には稼働予定である。これにより利根運河は洪水時の水の調整の役割のみを果たすことになり、平常時は利根川から運河への水の流入は止まってしまうことになる。

今夏、テレビで放映されたイギリスの運河、全国に張りめぐらされている運河に船を浮かべ、長い休暇をゆったり過ごす人々がとても羨ましかった。

(1999年8月、古井)